様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００６２９

研究課題名（和文）漢字文化圏における近代二字漢語動詞と形容動詞の発達と交流に関する総合的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study on the development and interchange of modern Sa-alteration words and adjectival in the cultural circle of Chinese characters

研究代表者
沈　国威（SHIN, KOKUI）

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：５０２５８１２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：明治期に入ってから、日本語の語彙が大きく変容した。漢語系学術用語の他に、二字漢語サ変動詞語幹と漢語形容動詞の急増も目立っている。学術用語は、西洋の新しい学問を受容する際、新概念の表出に貢献するのに対し、二字漢語動詞、形容動詞は、必ずしも新概念を表すものではなく、叙述の枠組みを提供するものである。いずれも言語の近代化に深くかかわる要素である。本研究は、これまでの術語中心の新漢語の研究成果を踏まえ、サ変動詞語幹と形容動詞を中心に、特に日中における二字語漢語の近代以降の活発化を記述すると同時にその原因を解明すべく研究を重ねてきた。研究期間中に、雑誌論文21編、図書は単著3点、共編著3点を公刊した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
サ変動詞語幹と形容動詞の近代発達は、いずれも言語の近代化に深くかかわる要素だが、語彙体系の整備という視点から考察する研究は少ない。本研究は、これまでの術語中心の新漢語の研究成果を踏まえ、明治20年代を境に活発化したサ変動詞語幹と形容動詞の整備と漢字文化圏における環流を中心に考察してきた。
本研究の成果により、近代の言語事件として、日本だけでなく、東アジア諸国にも波及した言文一致運動に関する研究も広い視野をもって推し進められるだろう。

研究成果の概要（英文）：After entering Meiji period, great changes have taken place in Japanese vocabulary. In addition to the academic terms of Chinese family, the proliferation of stem and descriptive verbs in two-character Chinese is also very obvious. Academic terms are helpful to express new concepts when accepting new Western knowledge, while Chinese verbs and descriptive verbs do not necessarily represent new concepts, but provide narrative frameworks. These are all factors closely related to language modernization. This study is based on the research results of new Chinese with terminology as the center so far, focusing on left-change words and descriptive verbs, especially in describing the activation of Chinese with Chinese and Japanese words after modern times, and in order to clarify its reasons, it has been studied repeatedly. During the research period, 21 magazine papers, 3 books and 3 books were published.

研究分野：日本語学

キーワード：言語の近代化　言文一致　サ変動詞語幹　形容動詞　二字漢語　語彙交流　日本借用語　科学叙述

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本語の近代は明治中期の文語文から口語文への移行から本格的に始まった。この「言文一致」という名の事象には、(1) 一般民衆（国民）の書記言語の獲得、(2) 科学を語る（以下、科学叙述と呼ぶ）ことの実現、(3) 言語形式に束縛されずに自由に思想、感情を表現することの可能性という 3 つの側面がある。従来の研究では、(3) つまり文体論、文法論（特に文末形式）に研究者の関心が集中しており、近年になって (1) も注目されるようになったが、(2) については明確な問題意識がないまま現在に至っている観がある。明治期に入ってから、日本語の語彙が大きく変容した。漢語系学術用語の他に、二字漢語サ変動詞語幹と漢語形容動詞の急増も目立っている。学術用語は、西洋の新しい学問を受容する際、新概念の表出に貢献するのに対し、二字漢語動詞、形容動詞は、叙述の枠組みを提供するものである。いずれも言文一致の根幹にかかわる要素だが、語彙体系の整備という視点から言文一致を考察する研究はまだ少ない。なかでもサ変動詞語幹、漢語系形容動詞に関しては、体系的ではなく、個別語誌の形での考察が多い。わたしの研究は、近代日中語彙交流史からスタートした。その後、近代学術用語の形成と東アジアでの伝播と受容、近代キーワードが織り成す概念史へと範囲を広めた。個々の新語訳語について、その語誌記述は、語彙学、辞書学に重要ではあるが、語彙体系、そして言語そのものにどのような変化をもたらしてきたかという俯瞰的な視点も必要であることを痛感した。なぜなら近代語と前近代のそれには大きな段差があり、徐々に発展してきたのではなく、パラダイムシフトが起きたからである。

２．研究の目的

本研究は、これまでの術語中心の新漢語の研究成果を踏まえ、サ変動詞語幹と形容動詞を中心とした日中における二字語漢語の近代以降の活発化を記述すると同時にその原因を解明すべく研究を進める予定である。漢字語を中心とした日本語語彙体系の近代的再構築という視点を導入し、サ変動詞語幹と形容動詞の急増にその動機付けは何なのか、日本語近代語彙体系に何をもたらしてきたかを解明しようとするのが今回の研究計画の目的である。具体的には明治以降のサ変動詞語幹と形容動詞を発生、伝播、普及、定着という語誌事項を、日中語彙交流の視点から通時的に記述するものである。

３．研究の方法

近代学校制度の確立により、教育が普及し、漢字だけではなく、英語知識も一般民衆へと浸透していく。そのため、紋切り型の表現に満足せず、言語表現の多様化を追求する必要性が生じ、漢字語による同義語群の発達に繋がる。本研究は、二字語活発化のメカニズム、日中両言語の相互影響、文体変革との関係について考察するもので、まず考察の対象を日中同形二字漢語 6,400 語に定め、中国語のサイドから漢籍での出典、英華辞書での使用、日本語による影響を記述し、とりわけ幕末・明治初期以降活発化したサ変動詞 2,400 語、形容動詞 480 語に関しては、日中語彙交流の視点から考察した。漢字語の国語辞書への収録が『言海』(1888-1891) から『大言海』(1931) にかけて徐々に完成したものと想定し、この間の国語辞書を用い、考察対象を辞書成立の時系列に沿って調査することを実施した。本研究は、以下のような新しいアプローチを導入した。

科学叙述成立の視点：教室での教師・学生間の言語活動を科学叙述の典型と規定した場合、科学

叙述の文体論的特徴は何か。術語と漢語系の動詞、形容動詞がそれぞれどんな役割を果たしたかを考察した。
聴解可能の視点:聴解を可能にする条件として、方言の乱立や難解な古典語形式といった音声面、文法面における障碍の除去が挙げられるが、語彙面では、意味だけでなく、語形も整える必要がある。短すぎれば、聴解に困難を伴うからである。一字漢語が言文一致の達成と歩調を合わせるように徐々に減り、二字漢語が急速に増えたのは、このような音声学的な特徴によるものだと考える。和語と同義関係にある二字漢語についてその文体的、表現的特徴について分析した。
和漢相通の視点：既成の和語と同義、或いは類義の二字漢語が明治 20 年代に入ってから急速に勢力を拡大した。「和漢相通」の成立である。本研究は、この点について考察を加えた。

４．研究成果

本研究は、『言海』（1889-1891）から『大言海』（1932-1935）まで、十数種類の国語辞書を利用し、時系列に沿って、二字漢語の現代日本語の語彙体系への編入、プロトタイプの形成、漢字文化圏における交流などの面から考察を加えた。特に学習語彙（academic word）、語彙体系の近代化、日中語彙交流、言文一致といった視点を導入し、論文の執筆を進めた。

コロナ禍のため、研究計画は、一年延期し、2018-2021 年までの 4 年間実施した。研究期間中に、雑誌論文 21 編（内訳、依頼論文 3 篇、査読付論文 9 篇、英語論文 4 篇）、図書は単著 3 点（中国語）、編著共編著 3 点（日本語）を公刊した。基調講演に 10 回以上に招待された。The Formation of Modern Written Chinese: Writing Categories and Polysyllabic Words. By SHEN Guowei, *Reading the Signs: Philology, History, Prognostication, Iudicium.* 2018.5, pp.221-236. Modern Reorganization and Language Contact of the Chinese Vocabulary System, Guowei SHEN, Cultura. *International Journal of Philosophy of Culture and Axiology* 17(2)/2020: 137-162. に掲載され、日本の研究動向を海外に伝えた。2019 年 10 月に出版した『漢語近代二字語研究――語言接触與漢語的近代演化』（華東師範大学出版社）は、二字漢語の継承、発生、伝播、定着、交流を論じる研究の総合的成果である。中国の学界では、大きな反響を呼んだ。拙著『新語往還：中日近代語言交涉史』（2020 年 7 月、沈国威，北京：社会科学文献出版社，全 600 頁，58 万字）では、50 頁以上を割いて、二字漢語発生のメカニズムと日中間での移動を考察した。研究活動を通じて、二字近代漢語と言文一致運動との密接な関係に気づいた。北京大学主催の国際シンポジウム「現代文学と書記言語」に招かれ、「国語的科学、科学的国語（国語による科学，科学的な国語）」と題する講演をし、語彙の視点から研究する必要性を訴えた。更に科学研究費基盤A「明治日本の言文一致；国語施策と中国をはじめとする漢字圏諸国への波及についての研究」の研究活動とコラボレーションし、2018 年 12 月 15 日、同上科研 A 計画と関西大学東西学術研究所共催の国際シンポジウム「国語施策／言文一致運動を東アジアの視点から考える」を関西大学で開催し、シンポジウムの席上で「漢字文化圏における言文一致の語彙的基盤について」と題する報告をした。近代の二字漢語は、言文一致運動にも避けて通れない問題である。また、日本だけでなく、東アジア諸国にも波及した問題であるという認識が今後、言文一致の語彙的基盤という視点からその方面の研究に寄与するものであろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 沈国威	４．巻 42
２．論文標題 言文一致の語彙的基盤について――日中の場合	５．発行年 2021年
３．雑誌名 関西大学、中国文学会紀要	６．最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 沈国威	４．巻 2
２．論文標題 漢語詞彙体系的近代重構與語言接触	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国際漢語教育史研究	６．最初と最後の頁 63-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 沈国威	４．巻 17（2）
２．論文標題 Modern Reorganization and Language Contact of the Chinese Vocabulary System	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Cultura. International Journal of Philosophy of Culture and Axiology	６．最初と最後の頁 137-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 沈国威	４．巻 2018
２．論文標題 赫胥黎在日本	５．発行年 2020年
３．雑誌名 翻訳史研究	６．最初と最後の頁 176-198
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 沈国威	4．巻 52
2．論文標題 Evolution如何訳為“天演”?	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『東西学術研究所紀要』	6．最初と最後の頁 3-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 沈国威	4．巻 8
2．論文標題 基本詞彙與基本詞彙化：詞彙体系的近代重構	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『言語接触研究の最前線』	6．最初と最後の頁 23-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 沈国威	4．巻 8
2．論文標題 近代漢語の基本語化について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『言語接触研究の最前線』	6．最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 沈国威	4．巻 4
2．論文標題 『辞源』（1915）與漢語的近代	5．発行年 2018年
3．雑誌名 中国出版史研究	6．最初と最後の頁 7-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 沈国威	4．巻 第51輯
2．論文標題 近代書写語言的形式――文之類別與複音詞	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東西学術研究所紀要	6．最初と最後の頁 3-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 沈国威	4．巻 第5輯
2．論文標題 近代漢語の基本語化について	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『日本語言文化研究』	6．最初と最後の頁 18-28頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 沈国威	4．巻 第2期
2．論文標題 詞彙的体系與詞彙的習得	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『東北亜外国語研究』	6．最初と最後の頁 9-15頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 沈国威	4．巻 第4輯
2．論文標題 漢外詞彙教学與字詞語連続体	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『澳門理工学報』	6．最初と最後の頁 55-60頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 沈国威	4．巻 第10輯
2．論文標題 漢字的字義及其獲得	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『日語研究』	6．最初と最後の頁 60-74頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 沈国威	4．巻 No.1
2．論文標題 The Formation of Modern Written Chinese: Writing Categories and Polysyllabic Words.	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Reading the Signs: Philology, History, Prognostication, Iudicium.	6．最初と最後の頁 pp.221-236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　6件／うち国際学会　8件）

1．発表者名 沈国威
2．発表標題 新語往還：中日近代詞彙交渉史：その一、漢語如何影響日語？その二、日語如何影響漢語？
3．学会等名 大連外国語大学（オンライン）
4．発表年 2020年

1．発表者名 沈国威
2．発表標題 倫理学史語境中的赫胥黎與厳復：其一：赫胥黎的〝宇宙過程〟和〝倫理過程〟其二：『天演論』中的〝天演〟與〝進化〟
3．学会等名 北京外国語大学（オンライン）
4．発表年 2020年

１．発表者名 沈国威
２．発表標題 西学東漸與東亜詞語環流：其一：漢語如何影響日語？;其二：日語如何影響漢語？
３．学会等名 北京外国語大学（オンライン）
４．発表年 2020年

１．発表者名 沈国威
２．発表標題 近代日本における翻訳
３．学会等名 翻訳研究最前線フォーラム　上海外国語大学（オンライン）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 沈国威
２．発表標題 翻訳與近代学科建構：東学西学之間
３．学会等名 第四届西方文論中国問題高端フォーラム　於上海大学（オンライン）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 沈国威
２．発表標題 基于語料庫的近代詞研究
３．学会等名 東アジア文化交渉学会第11国際シンポジウム（2019年5月11日）ドイツ・エアランゲン大学（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 沈国威
２．発表標題 Evolution如何訳為「天演」？
３．学会等名 国際シンポジウム：何以為「人」？何以為「文」？――明末至近代中國文化與兩度西潮（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 沈国威
２．発表標題 赫胥黎在日本
３．学会等名 第五届全国翻訳史研究高層フォーラム（2019年9月21日）於内蒙古師範大学（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 沈国威
２．発表標題 漢語詞彙体系的近代重構與語言接触
３．学会等名 四百年来東西方語言互動研究――近代東西語言接触研究学術会議（2019年11月9日）北京外国語大学（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 沈国威
２．発表標題 中西如何会通？赫胥黎的“宇宙過程”與厳復的“天演”
３．学会等名 「歴史記憶與概念傳播」國際学術研討會　於台北國立政治大学（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 沈国威
２．発表標題 漢字文化圏における言文一致の語彙的基盤について
３．学会等名 国際シンポジウム「国語施策／言文一致運動を東アジアの視点から考える」（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計7件

１．著者名 沈国威	４．発行年 2020年
２．出版社 北京：社会科学文献出版社	５．総ページ数 593
３．書名 新語往還：中日近代語言交渉史	

１．著者名 沈国威・奥村佳代子	４．発行年 2021年
２．出版社 東京：東方書店	５．総ページ数 537
３．書名 文化交渉と言語接触	

１．著者名 沈国威	４．発行年 2019年
２．出版社 北京：社会科学文献出版社	５．総ページ数 375
３．書名 一名之立旬月踟躇――厳復訳語研究	

１．著者名 沈国威	４．発行年 2019年
２．出版社 上海：華東師範大学出版社	５．総ページ数 320
３．書名 漢語近代二字語研究――語言接触與漢語的近代演化	

１．著者名 沈国威他4名	４．発行年 2020年
２．出版社 大阪：関西大学出版部	５．総ページ数 314
３．書名 西士與近代中国：羅伯[耳+冉]研究論集	

１．著者名 沈国威（関西大学中国語教材研究会）	４．発行年 2018年
２．出版社 東京：東方書店	５．総ページ数 384
３．書名 シン式中国語学習シソーラス	

１．著者名 沈国威	４．発行年 2018年
２．出版社 北京：社会科学文献出版社	５．総ページ数 370
３．書名 一名之立旬月踟躇：厳復訳語研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

沈国威研究室 http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~shkky/ 東アジア近代新語訳語研究プラットフォーム http://www.globalhistory.cn/islib/conceptLs.htm 東亜近代新詞譯詞研究プラットホーム http://www.globalhistory.cn/islib/conceptLs.htm

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関